はじめに

「実践的コミュニケーション能力の育成」を目標として掲げた平成10年度版『中学校学習指導要領』から「言語活動を行うにあたり、言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること」（文部科学省，1999）が明記され、日常の授業において実際的な言語の使用場面の設定や、言語の働きを意識した指導において手がかりになるように「言語の使用場面」や「言語の働き」の具体例が示されるようになりました。

それまでの日本の中学校や高等学校における英語授業では「言語知識」の習得をまずめざし、その後に「言語運用」の機会を確保する「順次型英語教育」の考え方に基づく実践が長く行われてきました。しかしその実態は「言語知識」の習得に50分間の授業時間の多くが費やされ、「言語運用」は疎かになりがちでした。そのような実態に対して、言語の使用場面や働きを取り上げて指導することを求めるということは、生徒全員が言語知識として習得した同じ表現を使って言語活動を行わせるというそれまでの順次型指導から、言語活動の中で「適切な表現を自ら考える」指導への転換を意図するものでした。つまりこの指導要領を契機として、日本の中学校や高等学校における英語授業は、「言語運用」が「言語知識」の習得と並行して展開する「並行型英語教育」への構造転換を求められることになったのです。

当時、中学校の英語教員をしていた私にとって、並行型英語教育への構造転換は決して容易ではありませんでした。英語のネイティブスピーカーに出会う機会などは全くない山梨県の中学校・高校で英語を学び、コミュニケーションのための英語とは無縁の授業を通して習得することができたのは言語知識のみという世代の教員です。正直なところ「言語の使用場面」や「言語の働き」についての具体例を見ても、いったいこれをどのように日々の授業で活かせばよいのか全くイメージが湧かなかったことをよく覚えています。一念発起して、上京した際に洋書の専門店に行き Wilkins（1985）の *Notional Syllabuses*（Oxford University Press）などを買い求めて読んでみましたが、当時の私

の英語力と英語教育に関する知識では十分に解読することはできず、実質的な授業改善には至りませんでした。

この度「言語の使用場面と働き」に関する著作に取り組ませていただいた理由は、英語で適切に表現し伝え合うためには「英語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を確かで豊かなものにする必要があるからです。具体的には、実際の言語使用場面において、言語使用の目的に合う働き・機能をもつ英語表現を適切に選び、目的達成のために意味のあるやり取りを行うための能力を育成することに他なりません。しかし、言語の使用場面と働きについてわかりやすく実践的に解説している資料は極めて少ないという実態があります。確かに『学習指導要領解説』には場面・働きの例示に加えて適切な「表現例」まで示されていますが、質的・量的に決して十分とは言えません。また、*Threshold Level 1990* を翻訳した『新しい英語教育への指針―中級学習者レベル指導要領―』（米山・松沢，1998）は非常に貴重な参考資料ですが、「しきいレベル」と学習指導要領に示された日本の学校英語教育のレベルにはギャップがあり、そのまま活用することには無理があります。

2021 年度から順次実施される学習指導要領においては、これまでの高等学校に加えて中学校においても、「授業をコミュニケーションの場」とするために「英語で指導することを原則とする」という方針に沿って、実際の言語使用に近い言語活動が中心となる授業づくりをめざし、「言語の使用場面」と「言語の働き」を考慮しながら、他の技能と組み合わせて「有機的」な指導を行うことの重要性が強調されています （文部科学省，2011；同，2012）。本書は、そのような授業づくりを行うために「言語の使用場面と働き」を具体的にどのように取り上げて指導すればよいのかを検討する際の参考資料と位置づけられるものです。先生方が「言語の使用場面」や「言語の働き」についていっそう理解を深められ、生徒たちの英語コミュニケーション能力育成につながる授業づくりに役立つことを願っています。

なお、本書は 2021 年度明治学院大学学術振興基金による助成を受けて刊行させていただきました。ここに記して、感謝を申し上げます。

2021 年 11 月

杉田　由仁

英語授業における「言語の使用場面」と「言語の働き」活用ガイド

目　次

はじめに……i

「場面別機能」参照ページ早見表……vi

第１章　言語の使用場面……1

1. 言語の使用場面の例　1
2. 場面中心教授法（Situational Method）　5
3. 概念・機能アプローチ（Notional-Functional Approach）　6
   3.1　一般概念　8
   3.2　特定概念　10
4. ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）　13
5. 「言語の使用場面の例」の有効活用　16

第２章　言語の働き・機能……19

1. 言語の働き　19
2. 文法シラバスと概念・機能シラバス　23
3. 概念・機能アプローチにおける教材化　25

第３章　場面別「言語の働き・機能」……30

1. 社会生活の円滑化 ― コミュニケーションを円滑にする　30
2. 感情的態度を表明する・見つけ出す ― 気持ちを伝える　33
3. 事実に関する情報を伝える・求める ― 事実・情報を伝える　38
4. 知的態度・道徳的判断を表明する・見つけ出す ― 考えや意図を伝える　43
5. さまざまなことを行わせる（説得）― 相手の行動を促す　48

第４章　文法項目別「言語の働き・機能」……53

1. 文法から概念・機能へ　53
2. 文法項目別「言語の働き・機能」の例（中学校）　56

2.1　中学校 1 年生レベル　56
2.2　中学校 2 年生レベル　61
2.3　中学校 3 年生レベル　66
3. 文法項目別「言語の働き・機能」の例 （高等学校）　69
3.1　高等学校 1 年生レベル　70
3.2　高等学校 2 年生レベル　75
3.3　高等学校 3 年生レベル　80

第５章　言語の使用場面・働きを重視した授業の実際 …… 82
1. 中学校の授業展開例　82
【コラム】 4P アプローチ　87
2. 高等学校の授業展開例　88
【コラム】 小中高 10 年間の英語教育を連携させるポイント　93
3. 文法項目別指導例　94
3.1　be 動詞・進行形の指導例　94
3.2　助動詞の指導例　99
3.3　不定詞の指導例　103
3.4　動名詞の指導例　108
3.5　受動態の指導例　111
3.6　現在完了形・現在完了進行形・過去完了形の指導例　115
3.7　比較級・最上級の指導例　120
3.8　現在分詞・過去分詞・分詞構文の指導例　125
3.9　関係代名詞・関係副詞の指導例　129
3.10　仮定法過去・仮定法過去完了の指導例　135

参考文献 …… 138

索　引 …… 141

「場面別機能」参照ページ早見表

（ア）コミュニケーションを円滑にする		
機能 1	話し掛ける（中）	p.31
機能 2	相づちを打つ	p.31
機能 3	聞き直す	p.31
機能 4	繰り返す	p.32
機能 5	言い換える（高）	p.32
機能 6	話題を発展させる（高）	pp.32–33
機能 7	話題を変える（高）	p.33
（イ）気持ちを伝える		
機能 1	礼を言う（中）・感謝する（高）	p.34
機能 2	好みを言う／問う	p.34
機能 3	褒める	pp.34–35
機能 4	苦情を言う（中）	p.35
機能 5	謝る	pp.35–36
機能 6	歓迎する（中）	p.36
機能 7	共感する（高）	p.36
機能 8	望む（高）	p.37
機能 9	驚く（高）	p.37
機能 10	心配する（高）	p.38
（ウ） 事実・情報を伝える		
機能 1	説明する／確認する	pp.39–40
機能 2	報告する	p.40
機能 3	発表する（中）	p.40
機能 4	描写する	p.41
機能 5	理由を述べる（高）	p.41
機能 6	要約する（高）	p.41
機能 7	訂正する（高）	p.42
機能 8	質問する	p.42

（エ）　考えや意図を伝える		
機能 1	申し出る	p.43
機能 2	提案する（高）	pp.43–44
機能 3	約束する（中）	p.44
機能 4	意見を言う（中）・主張する（高）／確信の程度を表明する	pp.44–45
機能 5	賛成する	p.45
機能 6	反対する	p.46
機能 7	承諾する	p.46
機能 8	拒否する／断る	p.47
機能 9	推論する（高）	pp.47–48
機能 10	仮定する	p.48
（オ）　相手の行動を促す		
機能 1	話し掛ける（中）	p.49
機能 2	依頼する	p.49
機能 3	招待する（中）・誘う（高）	p.50
機能 4	命令する	p.50
機能 5	許可する（高）	p.51
機能 6	助言する（高）	pp.51–52
機能 7	注意を引く（高）	p.52
機能 8	説得する（高）	p.52

（中）は中学校での、（高）は高等学校での学習を表す。